

作成した紹介文

世界情勢が大きく変動しつつある今、日本を各国と比較することで物事の本質を掴み理解することが求められている。本書は、データと考えをもとに各国と比較して日本の実態を炙り出し、日本の民主主義の問題に目を背けず、どのようにしたらそれらが解決できるのかを問いかける。また、本書は、家族やジェンダー、社会運動などのテーマ別に問題を取り上げ、グラフと共に解説がなされているため、興味がある分野ごとに読み易い構造になっており、現代社会に問題意識を持つ若者に是非オススメしたい。

例えば、第4章において、筆者は、若者の友達は学校内など限られた空間で通用する、後に関係が失われてしまうことの多いものだとして述べている。しかしその後の文中で、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」の結果から、悩み事や心配事の相談相手として友達を挙げる割合が多く、一方で、家族を挙げる割合が少ないため、友達の存在感が強くなっているとも述べている。家族よりも友達に相談する方が多い理由は、友達は将来までつながっている可能性が低いから、逆に相談しやすいのかもしれない。

また著者は、他国と比べてみたとき、日本の授業の特徴を「演劇」と表現しているが、これは納得できる。確かに、日本の生徒たちは授業を聞くことに徹しており、発言を自由に伸び伸びと行わない。また、教師に対し答えを発言することはあっても、それはクラス全体の自由なディスカッションではない。このような授業風景から、初めから教師と生徒の間で取り決められた格式ばった台本通りに授業が進んでいるように思われるからだ。これでは、学力を養うことはできても、人間力、生きる力を養うことはできない。なんでもできる大人にとって都合のいいすごい人になることを強要するのは勝手だということを反省するべき、と著者は言う。

これから高校生が踏み出していく社会は、予めイメージが植え付けられたものが多いはずだ。だからこそ、まだその事実もイメージも、あるべき姿もわからないであろう若者が、新たな視点を持って社会と関わっていくべきだろう。グローバル化が十分に進み、海外に移住することも不可能では無い現在、日本が変わらなければ、より良い環境が整った海外諸国に出ていってしまう若者が増える可能性がある。それを防がなければ日本はさらに没落していくはずだ。その可能性を少しでも下げるために、今こそ、日本の若者は、個人としての意見を持ち、著者が期待するように、SNSなどのツールを用いて発信し、社会を変えていく力が自分たちにあることに気付くべきだろう。